

博物館の機能上の一つの課題

—— 身体障害者へのサービス ——

A Consideration for the Function of Museum —Facilities for Handicapped Visitors—

岩 崎 友 吉*

Tomokichi IWASAKI

戦後何年かして東京国立博物館でフランス展が開かれて間もなく、私は歩行の困難な人のために博物館にせめて車椅子を備えたらという希望を同博物館のニュースに寄稿した。ほんの小さな提言であったがそのうち車椅子が備えられて嬉しかった。しかし身体障害者は歩行の困難な人に限らない。視覚聴覚の不自由な人や、難病で寝たきりの人も少ない。一般に言って、博物館は五感が正常な人を対象としてすべての企画が行われているが最近たとえば奈良国立博物館のように車椅子のためのスロープが設けられたことはまことによるこぼしい。

昨年の当学会の談話会（1979年1月27日於名古屋国立博物館）で多摩動物公園の遠藤悟朗氏から身体障害者と動物との接触についてのいろいろ興味あるお話を承った。更に御自身撮られた映画も見せて下さり、一同に大きな感銘を与えられた。

交通事故を防ぐため、駅のプラットフォームの工夫が一般化し、交差点で歩道から降りる部位の段差をなくし、身障者用のトイレやエレベーターもあらわれたことは喜ばしい。長野市の交差点で直交する二方向で盲人用に異なったメロディーを流しているのはすぐれた工夫である。私の記憶では交差点のメロディーは奈良市がかなり早かったようである。

以上大ざっぱな世間一般の状況であるが、博物館に於てはどうかと言うと新設の博物館では奈良国博同様何らかの便宜を計る姿勢が見られる。

言うまでもなく車椅子、エレベーター、トイレは基本的なものでいづれも博物館に来ることのできる身障者の機能を補うためのものである。

しかし、一歩進んで、少くとも部分的にでも感知能力があり理解力を持っている人に対してはその文化生活に協力する態勢を整えることは共に文化を享受するという意味で人道的に基本的なことである。この際、身障者に

に対するギブ・アンド・テイクの考へは精神的な範囲をあまり逸脱してはならないであろう。これらの人のために盡すことはその不幸な人とその家族をはじめその周囲のあらゆる人々への奉仕の精神から出発しなければとてもやって行かないのが現状だからである。

もうかれこれ10年にもなるであろうが、当時の宮崎の博物館長柳宏吉氏から盲学校の生徒に時々考古資料などの実物を手でさわってもらっているという温いお話を承った。実は私がお手伝いのため何回か宮崎県博に通っていた頃、よく近くの盲学校の生徒を見かけたので、あの人達にも是非という私の希望に、柳館長はもう実践しているということをつつましやかに私に答えて下さったのであった。もちろんほかの博物館にも同じ温い心の方々が多数居られるに違いない。

私のせまく浅い経験ではさきへのべた東博の車椅子と、この宮崎県立博物館（現在の総合博物館）とが身障者へのサービスという活動のあけぼという印象を持っている。

さて車椅子による展示ケースへのアプローチには意外な問題もあることが、談話会で知らされた。一直線に並んだ展示ケースに対して車椅子がそのままではいつも横の位置にあり、身をよじらないで正面から見ようとするといちいち直角に向きを変えなければならないという不便がある、ということであった。

また盲人に対する手触の問題にもわれわれの想像できない事実が内蔵されていることが知らされた。たとえば普通の人はまず視覚的につかんで好き嫌いがきまり、手で触れるのは次の段階である。ところが視覚の段階を経ないで手で触れることからはじめた時の事例を伺ったが、たとえば蛇を手で攪んですこしもこわがらず細長いことに興味を持つ、これは多くの人がかわがる顔や開いた口などに対する視覚的な気味悪さがないためであろう。これとは対照的に兎の場合姿がかわいいという視覚的な近

づき方ではないため、そっと手をさしのべて突然やわらかい毛に触れると一瞬気味悪くてためらうということであった。

このわずか二つの例からしても感覚的に別の世界が存在することを確認した上ですべての企画にとり組まなければならないことが分る。次にひとつの例として、はじめから盲人用に造ろうとする一つの考古資料の模造品を考えて見る。

ある企画でいろいろな制約から視覚に訴えと同じ模造品が造られることになったが、これは重大なあやまりではなかろうか。たとえば一つの土器を見て、経験的にすぐそのざらざらな肌合いを想像できる人はその模造品に触れた時、それがたとえすべすべであっても、本当はざらざらなのだという理解を持ち得る。しかしいきなり手ざわりだけでその表面を理解しようとする盲人はうわぐすりのかかった陶器に近い印象を受けるであろう。このやり方は思いやりが足りないという一語に盡きるが、わかっているにもかかわらずこのようなものを造るように追いつめた企画だとすれば、その由って来たところに問題がある。この種の作業はどこかに冷たい要因があると、目標からそれる。

受入側の更に一歩進んだ態勢として手話による説明理解の方法がある。これは説明文を書いて置いておくのと違い、ちょうど現在行われている列品解説に相当するも

のである。

毎日となると手が廻り切れないとも思われるから、少くともはじめは日をきめて手話による説明をしたり、小人数での座談等からはじめたら如何であろうか。ただしこれは今のところ学芸員有志が手話を習得して奉仕するかたちで出発しなければなるまい。

先日の談話会でも、あとから反省して見ると話をするのに不自由のない身障者にはできるだけ参加してもらって実際問題についての声を聞かせて頂いたらもっと遥かに成果が大きかったであろう。

あらかじめそこに思い至らなかったことを深くお詫言すると共に、この分野に於けるサービスの進展を大きく期待して止まない。

しかしあの談話会は名古屋市立博物館の諸賢の御努力で非常に熱心な討議に終始したことは画期的なことと思う。

また身障者や寝たきりの病人を看護する健気な人々の心労にわれわれは深く思いを致すべきであろう。心身は健全でも大きな重荷を負っているこれらの人々が文化的な憩いの場を見出せるような博物館も育てて欲しいものである。

* (いわさき ともきち)